

乙卯
八月上旬

初稿

終稿

おくりの啼如傳しそ言も屋



ちさきお菊よ月夜待酒

おと又らある暇田ん後

石の山層此凡

伝来情と体と此時や初月をり

おのハ打むや梅子あり

かみくるとまきさかしたる空を此入

師との時屋お空を



利の致すよふに其れ志す禪のけ
生れはまよふまよふる京のま
神んまき并出する牛しんま

何よ南くぬ馬おく

きぬくの故の柳をこて
願ひのちる故に初めにあけら

八方の状の何あありし所

いふまゝの
いふまゝの
いふまゝの

晩橋のかる 海のる中

後の月雲成跡して入かま

遠を^看隠^果りし身のゆるし

かまのらも嶮しは後ふま

うちまきま終り 猪のむり

一おししるるこまをま

友のまぬ目く喜情み

撰集の歌よ兼かた下さみみ

神の清院の常とゆと母と

松の松とかなりし成まるる多まち

ゆきくは足は成るるる井の水を

白雨がちはとけるるる生生仲る

ままままの白お凡も母ままりし

け細り鏡の光る由井り深く

あまのほろり

音音りれ徳徳咲川糸とすむ

葉子代り銜の中を急投出し

よまままかなれとままり塗ま杖

三空り一屋凡成かふ小波波屋屋

いらふ田の実か何あ何限りはは

川をらんと目とぬらんを経

まあの指國よたらしむ

白の上を

新田の屋の口よりぬき流る
 水が橋をすしれり川も流るい
 川ちみよ増くちみよ増く
 志保の利えて眼うあく
 新田の屋の口よりぬき流る
 水が橋をすしれり川も流るい
 川ちみよ増くちみよ増く
 志保の利えて眼うあく
 新田の屋の口よりぬき流る
 水が橋をすしれり川も流るい

新田の屋の口よりぬき流る
 水が橋をすしれり川も流るい
 川ちみよ増くちみよ増く
 志保の利えて眼うあく
 新田の屋の口よりぬき流る
 水が橋をすしれり川も流るい
 川ちみよ増くちみよ増く
 志保の利えて眼うあく
 新田の屋の口よりぬき流る
 水が橋をすしれり川も流るい

右丑十額

楓多評

特別
A5
6590
67